

2006 年 2 月 刊行

西洋美術史論考

— 北方ヨーロッパの美術 —

勝 國興 著

中央公論美術出版



目次

第一章 中世

- 1 ゴシック聖堂の光
- 2 ナウムブルクの彫刻家
- 3 ドイツ中世の祈禱彫刻像について



第二章 ルネサンス

- 1 皇帝マクシミリアン一世
- 2 北方ルネサンスの美術
- 3 グリューネヴァルトの《聖アントニウスの誘惑》図について
- 4 神殿の少女
- 5 グリューネヴァルトの素描様式
- 6 デューラーのイタリア旅行
- 7 デューラーのイタリア体験
- 8 デューラーの美術論における Kunst の概念
- 9 デューラーとグリューネヴァルト
- 10 ヴァザーリの「マルカンターニオ伝」
- 11 ヴェネツィアの『ドイツ人商館』の壁画復元の研究
- 12 前川誠郎の『デューラー二題』



第三章 近現代

- 1 プラハのマニエリスム
- 2 美術における共同制作
- 3 リューベンスとカールトンとの往復書簡
- 4 ローマのヴィラ・マルタに集う人びと
- 5 ウィーン、一九〇八年『クンストシャウ』（芸術総合展）以後



あとがき
図版リスト
初出一覧
索引

本書の内容

第一章

中世の西洋美術をリードしたフランスのゴシック聖堂論ではその「光」に焦点を当てて、建築様式を背後から規定している神学的な光の形而上学を考究している。また当時のドイツは芸術先進地域のフランスから多くを学んだ。その具体的な経緯を、ドイツの一彫刻家を手がかりにして論証する。これは美術の伝搬の問題であると同時に、またフランス美術のドイツ化の問題でもあった。ドイツ美術に特殊な主題の「キリスト・ヨハネ群像」論はこのことを追求している。

第二章

古代の伝統と人文主義の教養文化をもたなかった北ヨーロッパのルネサンス美術は、その発祥地イタリアを手本に仰ぎつつも、しかしこれとは異なるゲルマン民族固有の芸術を創造した二人の画家、グリューネヴァルトとデューラーを取り上げて、この事情を考察している。神秘主義思想を精神的基盤にした前者の造形が北方の伝統に深く根ざしたものであることを、グリューネヴァルトの代表作《イーゼンハイム祭壇画》で指摘すると同時に、彼の様式の特殊性がその素描に顕著に見られることを論証する。また後者デューラーは、ドイツ人としてはじめて当代の新美術の研究を目的としてイタリアを訪れた画家であった。その後の北方世界に甚大な影響を与えた彼の画家としての形成史を、ここで殊に前半期の作品とその美術理論から考察している。

第三章

マニエリスム美術がプラハで隆盛を極めたのには、皇帝ルドルフ二世の特異な知的関心と美的感性とが関係していたことを明らかにする。北方バロック絵画の巨匠リューベンスとその弟子や同僚画家たちが行った「共同制作」では、とくに制作に先行する芸術家の創造的天才が重視されたことを指摘する。分裂状態を経て統一国家へいたった一九世紀から二〇世紀のドイツ民族の芸術的課題は、民族としてのアイデンティティーの追求と表現であった。ヴィラ・マルタとウィーンで、バイエルン王ルートヴィヒ一世と彼を取り巻く芸術家たち、および表現主義運動について行った論述は、このような観点から述べたものである。

物事を理解するのに二項対立を用いると、互いに対象が鮮明になるところがある。かつてデヒオは、このデューラーとその対極にある人物としてグリューネヴァルトを挙げ、二人はドイツ芸術に潜む二元論の個人的な顕現だと述べた。デューラーが普遍的なものへの飽くなき探求へ燃え、理性によつて芸術を確固たるものとしよとの義務感と自らを否定する自己犠牲すら厭わなかったのに対し、グリューネヴァルトはドイツの固有な伝統に強く刻印された、自らのデーモンに身を委ねる夢遊病者である。前者はオールラウンドの表現技術を身につけ、軸足を郷里のニルンベルクに置きながらもその業績と名声は国境を越えていったが、後者はただ画家であることのみに終始し、生まれ育った確たる故郷も明らかでなく、孤独で、歴史からは早く忘れ去られてしまった。そしてデューラーの生涯と創作は克明に辿れるが、グリューネヴァルトの生涯には欠落と謎が多い。デヒオ以後ほぼ一〇〇年が過ぎた現在、謎がすべて解けたわけではないが（二〇〇二年の展覧会カタログ名は依然として『謎グリューネヴァルト』となつてゐる）、グリューネヴァルトの生涯と創作はかなり明らかになってきた。イーゼンハイムの修道僧をパトロシとし、マインツ大司教兼神聖ローマ帝国尚書の宮廷画家を務めた人物であつた。建築の造営に携わつたことも明らかとなつた。これは夢遊病者にできることではない。しかしその大芸術家が歴史の忘却の淵へ追いやられていたとなれば、ことは簡単でない。ここに謎の一つがある。とはいえ、二〇世紀初頭以降の現代美術への影響の点では、いわば陽のあたる場所に居続けたデューラーを超えるものささある。ホルスト・ヤンセンの線描画にデューラーの描線が生きているのに劣らず、いなそれ以上にオットー・ディクスやアルヌルフ・ライナーの画面にはグリューネヴァルトのデーモンが息づいている。ピカソですらその埒外の人ではない。

【組見本】 50%縮小

第二章 ルネサンス



図 105 デューラー 《キリストの啓閉》(B.8) (大受難伝) 1496～97年頃



図 104 グリューネヴァルト 《キリストの啓閉》 1505年頃 ミュンヘン アルテ・ピナコテーク

9 デューラーとグリューネヴァルト



図 103 デューラー 《キリストの啓閉》(B.30) (小受難伝) 1508～09年頃

ヴァイクスゲルトナートの推測は、本版画の成立した時期（五〇八、九〇九年頃）にデューラーがグリューネヴァルトのキリストの啓閉を知つたことを前提としなければならない。グリューネヴァルトのこの作品は二五五年ごろ制作の版画で、しかも時はアシャッフェンブルクの参事会聖堂にあつたから、この画面からいくつもの特定のモチーフを借用するには、デューラーは二五〇八、九〇九年頃より以前に同地に訪れてゐる必要があるだろう。このようなデューラーの小旅行の事実は知られていない。ヴァイクスゲルトナート自身多くの事例で指摘しているように、デューラーとグリューネヴァルトの関係は逆に見る方が自然である場合が多い。グリューネヴァルトの《啓閉》（図四）には、逆にデューラーの初期の作品から借用と考えられるモチーフが多く見られるのである。まず、左手で頭髪を掴み、右手で拳を振り上げる刑吏は、デューラーの木版《大受難》（二四九六

／七年頃）（図四）に両手の左右を逆にして登場する。最後列でこの刑吏の背後から顔だけのみをみせる青年と中央四柱の右へ三人目の同じ顔だけ見える人物とは、グリューネヴァルトの中央背後の少年と右後側の人物とに共通する。また《啓閉》の向い合う頭巾の男と右手を差し出す肥つた男とは《啓閉》の前後の二人の男に類似する。この肥つた男の人物の対照がデューラーの銅版画《料理人とその妻》（二四九五年以前）にその先例をもつことを指摘したのはワルビエである¹²。彼はさらに進んで、頭巾の男にキリストへの同情者をみ、これを作者グリューネヴァルトの自画像と解釈したが、少なくともモティーフとしてみればこの人物像はすでにデューラーの版画に存在したものである。また《啓閉》の前景で大きな比重を占める後向き刑吏も、からだを弓なりにしてキリストを縛り上げたつなを曳く姿で《啓閉》に登場する。後向きの人物表現は《啓閉》に限らずしばしばデューラーの版画にみられるもので、この場合はおそらくH・A・シュミットが指摘したように¹³、木版画《聖女カタリナ殉教》（二四九七年頃）の処刑人の姿がモデルとなつたように思える。

（イーゼンハイム祭壇画）にも、デューラーの的な面構



著者 勝 國興 (かつ くに おき)

サイズ B5 判

頁数 口絵 16 頁

本文 456 頁

図版 213 点

体裁 上製本・函入り

定価 25,200 円
(本体 24,000 円 + 税)

ISBN4-8055-0520-6 C3070

本書の特色

- * 北方ヨーロッパの美術について、中世から現代までを通史的に多数の図版とともに俯瞰し、また近接して多面的に考察した著作。
- * ドイツの近世芸術史の冒頭を飾るデューラーと、画家であることのみに終始した未だ謎の多いグリュネヴァルトという対極的な二人の作品・理論を深く考察するとともに、比較を通して、その後の北方美術への影響にもアプローチしている。
- * 本書は、美術史的な考察のみならず、中世・ルネサンスの建築史的なことについても管見・言及している。

【著者略歴】

1934 年、鹿児島県出身。1964 年、九州大学大学院文学研究科博士課程（美学美術史）単位取得。1972～74 年、1985～86 年、ドイツ、ゲッティンゲン大学、次いでミュンヘン中央美術史研究所留学。1964 年、九州大学助手。1965 年、大阪府立大学助手、1968 年以降、同志社大学専任講師、助教授、教授、1984 年より同大学院教授。現在、同大学名誉教授。本務校の他、非常勤講師として九州大学、大阪大学、神戸大学、東京大学、京都大学、大阪芸術大学等で、ドイツ・ルネサンス美術を中心に講義を行なう。

【主要著訳書】

『グリュネヴァルト』（朝日新聞社）
『北方ヨーロッパの美術』[共著]（岩波書店）
『北方ルネサンス』[執筆編集]（小学館）
ベネッシー『北方ルネサンスの美術』[共訳]（岩崎美術社）
ドイヒャー『ゴシックの美術』（グラフィック社）
シュトリーター『デューラー』[監修翻訳]（中央公論社）
クルターマン『美術史学の歴史』[共訳]（中央公論美術出版）
パノフスキー『初期ネーデルラント絵画』[共訳]（中央公論美術出版）

【関連書籍】

初期ネーデルラント絵画 その起源と性格

E・パノフスキー 著
勝 國興・蛭川順子 共訳

B4 判上製函入（2 分冊）
本文編 524 頁、図版編 354 頁
定価 81,900 円（本体 78,000 円 + 税）
ISBN4-8055-0396-3

美術史研究に燦然と輝く名著の本邦初の翻訳。本書はこの分野の研究の中でも画期的な著作であり、イコノロジー（図像学）の方法で最も成果を収めた大著である。490 点を超える貴重な作品写真の翻刻、原著注解、精選文献一覧、索引など詳細なデータを収載、訳者による解説からなる。

美術史学の歴史

ウード・クルターマン 著
勝 國興・高阪一治 訳

B5 判上製函入
本文 556 頁 挿図 149 図
定価 29,400 円（本体 28,000 円 + 税）
ISBN4-8055-0289-4

プラトンの古代から 20 世紀の現在に至るまでの美術史学について、その業績の本質・意義等の解題を加えつつ通史的に辿った世界で初的美術史家人名辞典の日本語版。登場する美術家＝美術史家は実に 1192 人に達し、美術史研究者はもとより図書館等のツールとして必備の辞典である。

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取扱いは